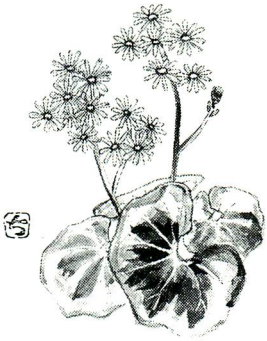
みめぐみの

第14部

みめぐみの

第14部



大谷光道著

目次

現世利益……2
この世での良いこと、おまけ、サービス券…3
神々に護られる……6
良いことのパック、悪いことも良いことになる…9
数限りない仏様のお護り、お褒め……14
阿弥陀様に護られて、喜びがいっぱい……19
外から見えるご利益……22
〝私〟と現世利益……25
読者の頁……29
あとがき……31

現世利益

毎日暑い日が続きます。気温が三十度を超えると、人間の思考力は半分になると聞いたことがあります。今年の夏は格別に暑いので、クーラーがあってもしばらくすると効かんようになってきます。昨日こちらに来るときなんかも列車のクーラーがおかしくなって汗が出てくるので、車掌さんに何とかならないのかと皆が文句を言いだす始末です。

市民の教養団体「横浜中央木鶏クラブ」で
「他力と元気―神と仏」と題して講演

そんな中で私がこのお話のための勉強をしたということを、最初に言い訳をしておきます。でも、今から暑くなってくるとお互いに思考力が半分になって、半分同士で調子が合うから、問題ないわけですわね（笑）。

ご承知のように、浄土真宗はこの世での命が終わったら極楽へ行って生まれ（往生）、そこで覚りを開く（成仏）教えです。しかし、それだけでは浄土真宗の信心の成果（ご利益）の半分にしか過ぎません。あと半分はこの世での「良いこと」なのです。

今日は、信心を頂いたら一体どんな「良いこと（ご利益）」があるのかについてお話したいと思います。

この世での良いこと、おまけ、サービス券

神仏にお願いすることによって、「お金儲けができる」とか、「病気が治る」とか、あるいは「入学試験に合格する」とか、こういうのを「現世利益」と

いいますね。

今日は「この世での良いこと」のお話、つまり現世利益のお話です。浄土真宗にも現世利益はあるんですよ。ただ、神仏にお願いして……、という他所でいう現世利益とはちょっと趣が違います。

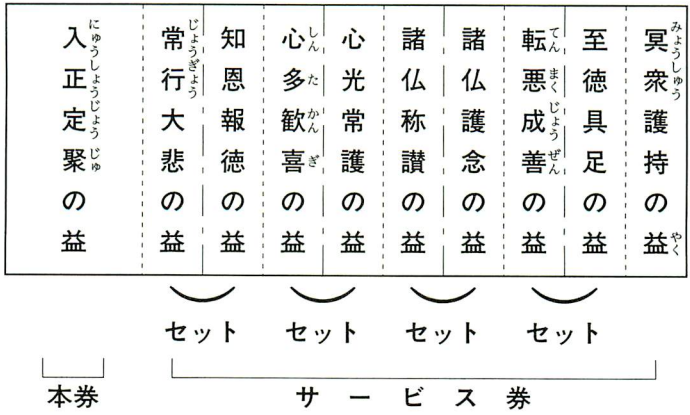
浄土真宗は、浄土の教えである以上、現在の命が終わったら――つまり死後――お浄土（極楽）に行って生まれ（往生）覚りを開く（成仏）ことを目標とする教えであることに、変わりはありません。ただ、「往生できる」ことが決まるのが「今」であって、まさに命が終わろうとするとき（臨終）を待つ必要がないというのが、浄土真宗の大きな特徴の一つ（平生業成）です。そして、「私はやがてこの世の命が終わったらお浄土へ行って覚りを開ける身である」と実感することを「信心」といいます。

信心をいただくと、「やがてはお浄土に行って成仏できる身となる」ので、「信心」はお浄土行きの予約切符であり、指定席券だとお考えください。そ

してこの切符にはさらにおまけ、サービス券が必ずひっついています。このサービス券が浄土真宗の現世利益です。

他所でいう現世利益の場合は、ご利益目当てに神仏にお願いするということで、ご利益が目的であって、ついでにおまけとしてひっついてきたものとは違うということです。露骨に――わかりやすく――言えば、「神仏の力を利用して、自分の欲望を満たそうとすること」ですね。

たとえば、何かの祝賀会などで模擬店が出たりすると、お寿司の券、おそ



〈浄土真宗の現世利益のイメージ〉

ばの券、焼き鳥の券……などとついていますね。あれを思い出してください。お浄土行きの指定席券のおまけ、サービス券は十枚（『教行信証（信の巻）』・現生十種の益）ついています。ただし、「信心をいただいた状態」そのもの、つまり現世利益の大元をもご利益の一つに数えるので（入正定聚の益）、サービス券は九枚ということになります。

その九枚のお話を今からいたします。

神々に護られる

一番初めの良いことは、多くの神々が護ってくださるというご利益です。「仏教なのになんで神々……？　仏様でしょ。」とお尋ねがあるかもしれません。しかし、仏教にも神様はおられて、梵天、帝釈天、四天王、毘沙門天……などといえば、一度は耳にされたことでしょう。「天」とは神の意味で、これらの名前やそのお像、お話はすべてどこかのお寺で見聞きされたと

思います。

もちろん、仏教では仏様が中心で、仏の教えに従って私たちは仏道を歩みます。私たちが手を合わせるとき、前には仏様がおいでになります。これに対して仏教でいう神は「守護神」ないし「外(げ)護神」で、仏道を歩む者を側面から護ってくださっています。

そこで、「天」「神」などをひっくるめて「冥衆(みょうしゅう)」といいます。見えないけど確かにあると信ずるものを「冥」といいますよね。冥加(みょうが)、冥福(めいふく)、冥利(みょうり)……。それで、この一番目の冥衆が護ってくださるご利益に「冥衆護持の益」という名前がついています。

親鸞聖人は浄土和讃の中に「現世利益和讃」の一節を設け、十五首のご和讃を詠(よ)まれました。さらにその中の八首までがこの「冥衆護持の益」を讃(たた)え、念仏の行者が冥衆に護られることが説かれています。

「ナムアミダブヲ称フレバ」で始まるご和讃が続き、「南無阿弥陀仏を称

える行者は神々から敬われ、影がいつもついて来るように、夜も昼もつねに護られる。」と繰り返し讃えられています。その神々としては、

梵天、帝釈天（共に諸天の長）　四天大王（東西南北を護る神）
堅牢地祇（地面を支える地の神）　八大龍王（龍神）とその一族
閻魔大王とその臣下の役人　他化自在天の大魔王（善魔）

の名前がずらりと並んでいます。各々の神々の説明は長くなるので今はいたしませんが、閻魔大王などおなじみの方もおられます（笑）。

また八首目には、本来は仏法に害をなすはずの「悪鬼神」も、念仏の人に出会うと恐れて逃げてしまう、念仏の威力に太刀打ちできない、ということが示されています。

皆さん、吉崎の鬼の面、嫁威し、ご存知ですね。あのお話を思い出していただくと面白いんですが……。

あれはお婆さんが嫁を威そうとしたけれども、嫁が威されなかった。それ

でお婆さんのほうが腰を抜かした。行き所がなくなってしまった。これが「悪鬼神」ですね。念仏の信者を威そうとして、鬼のほうが立ち往生しちゃったということを思い出してください。あれは人間が化けた鬼だけれども、念仏の人に完敗しました。

良いことのパック、悪いことも良いことになる

ここからはご利益が二つずつセットです。表と裏の関係になっています。南無阿弥陀仏を称えることを念仏といいます――これは当たり前です(笑)。では、何故ナムアミダブツを称えるのでしょうか。私流にいうと、阿弥陀様に惚(ほ)れているからです。子供が母親に「お母ちゃん」と呼ぶのと同じことだとも説明されます。

また、ナムアミダブツは阿弥陀様のお名前(お名号(みょうごう))です。しかし、ただのお名前ではなく、ナムアミダブツの中には阿弥陀様が長い長い間ご修行く

だされた結果完成（成就）したあらゆるお徳が、ぎっしり詰まっているのです。この山のようなお徳を私たちにプレゼント（回向）するために、そして私達が受取りやすいように、たった六字という短い中にぎっしり詰め込んでくださったのです。

ですから、信心を頂いて――阿弥陀様に惚れて――南無阿弥陀仏を称える私達の身には、このお徳が備わります。それで親鸞聖人は、この二番目に良いことに「至徳具足の益」という名前をお付けになりました。ご和讃に、

五濁悪世の有情の　　選択本願信ずれば
不可称不可説不可思議の　　功徳は行者の身にみてり

とあります。お念仏を頂くことで、「説明することもできない、体で示すこともできない、考えることもできない」それほどすばらしい功徳が行者――念仏を称える信心の人――の体に満ち溢れている、というご和讃です。

この間、他所で「お念仏の中にあらゆるお徳がパックされている。」とお

話したら笑われてしまいました。それで私は自信を持って「本当ですよ。」と言ったのですが……。このあたりはあまりに浄土真宗が易しすぎて、「本当かいな。そんな虫のいいこと……。」となるのでしょう。だから「易行」というのですがね。

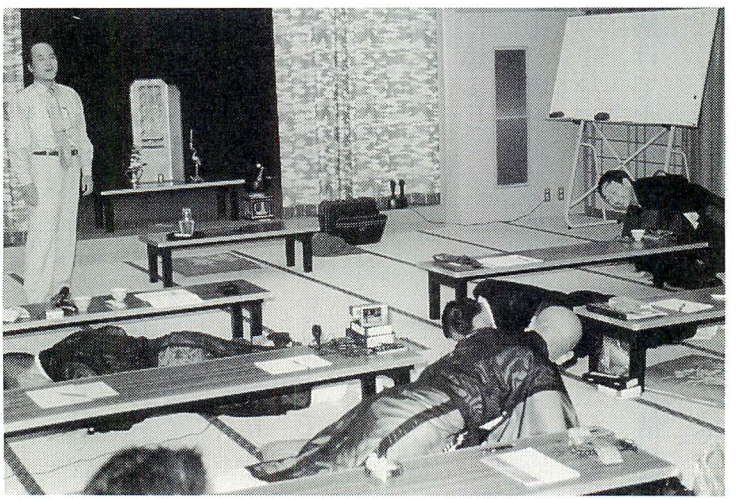
次にこれとセットとなるのは「転悪成善の益」。字の如く「悪を転じて善と成す」ということで、これは煩悩がそのまま菩提になるいうことです。ご和讃に、

罪障功徳の体となる　氷と水の如くにて
氷多きに水多し　障り多きに徳多し

というのがあります。罪障（罪のさわり）が功徳の体（中身）となる。つまり煩悩によって起こってくる罪が功徳の中身に変わってしまう。煩悩を氷、菩提を水にたとえて、氷という煩悩が解けて水になる。熱いと氷は解けますが、氷のように固まって頑固などうしようもない煩悩が解けて水のように柔

軟な菩提となる。だから煩悩と菩提とは同じ物である、解ければ菩提なんだというご和讃です。だから氷・さわりは多いほどいい。多ければ解けたときそれだけ多くの水・菩提になるからだ。こういう比喩でもって、ご和讃を作っておられます。罪が転じてそのまま功徳になる。それが「転悪成善」で、前の「至徳具足」とセット、表裏でセットになっています。

このことから、「悪いことはすればするほど良いんだ。」（造悪無碍）



大谷声明研修会での練習風景。腕立て伏せの姿勢で腹式呼吸を体感

という理屈が出てきます。本気でこれを実践しようとする人達が、法然上人や親鸞聖人の時代にも出てきて、この問題にご苦労になりました。

「罪」というのは、客観的な罪ではなく、「感じる罪」と考えないといけません。たとえば同じように他人に迷惑をかけてしまっても、平気な人もいれば悔い改める人もいます。宗教的な意味での罪、菩提の原動力になる罪は、「痛みを感じる」ところに意味があるのです。

わざわざ罪を作らなくても、いくらでも作っています。「十悪」といわれる罪にしても、不殺生、不偸盗（ちゅうとう）、不邪淫（じゃいん）……の一番初めの不殺生の段階で、私なんか既にひっかかってしまいます。毎日たいてい肉か魚を食べていますしね。

このように感じれば感じるほど、気づけば気づくほど阿弥陀様のお慈悲の深さがわかってくる。奥へ進めば進むほど奥が深いことが感じられる。およそ「道（どう）」と名のつくものは皆そうなのでしょうが……。

数限りない仏様のお護り、お褒め

阿弥陀様以外の多くの仏様をまとめて「諸仏」といいます。その諸仏がたに護られるのが四番目のご利益、褒(ほ)められるのが五番目のご利益です。

まず、念仏の行者が諸仏がたに護られる（諸仏護念の益）ことは、『阿弥陀経』に説かれています。「ヘンプー、サンゼンダイセンセカイ……」、『阿弥陀経』を時々お読みになる方は、「ああ、あれか。」と思われたでしょう。これが六回繰り返されますね。東方世界から始まって、南方世界、西方世界と、東、南、西、北、下、上。私はマージャンしませんが、あれと同じ順序ですね。トン・ナン・シャ・ペです。マージャンはどうでもいいんですけれど（笑）、それから下、上。六方――われわれを取り巻く世界全部――の各々について数限りない仏様がたが念仏の行者を護ってくださることが説かれています。

「恒河沙数の諸仏は各々ご自分のお国において、広く三千大千世界を覆うほどの大きな舌を出して説法される。『汝ら衆生よ。一切の諸仏は阿弥陀仏の不思議の徳をほめたたえられる。そして念仏の行者を護ってくださる。そのことが説かれたこの教え（阿弥陀経）を信ずるがよい。』と。」

ここに出てくるのが「恒河沙数の諸仏」です。数限りないことについて、お経などで「無量」とか「恒河沙数」などという表現に出くわします。「無量」の意味はわかるとしても、「恒河沙数」とは難しい言葉だと思えてしまいます。でも当て字だというだけで「ガンジス川（恒河）の砂（沙）の数ほど」という意味です。しかし気の遠くなるような数字です。それほど多くの仏様が念仏の行者を護ってくださいっているのです。

また、「広く三千大千世界を覆うほどの大きな舌を出して」とは、「それほど大きな声を出して」という意味です。

蛇足ですが、私はずっと以前は「恒河沙数」はお経以外には出てこない言

葉だと思っていました。しかし、お経だけの用語ではなく、極めて大きな数の単位（ゼロが五十二個付く数）であることをご紹介しておきます。さらに「無量」も大きい数の単位にもなっている（ゼロの数が六十八個）ことがわかります。

一	十	百	千	万	億	兆	京	垓	秭	穣	溝	澗	正	載	極	
0	1	2	3	4	8	12	16	20	24	28	32	36	40	44	48	
恒河沙		阿僧祇		那由他		不可思議		無量		大数						
52		56		60		64		68		72						

（左側の数字はゼロの数）

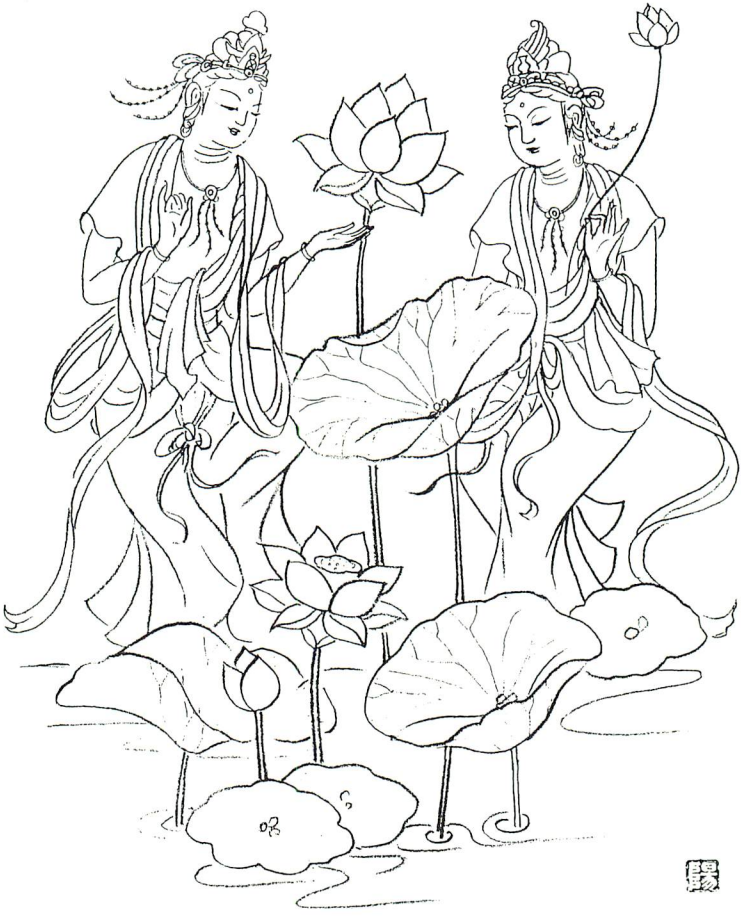
次に、これとセットになるのが「諸仏称讃の益」。これは、仏様たちが念仏の信者を褒めてくださるご利益です。

お釈迦様は念仏の信者を「わが良き親友（しんぬ）」とお褒めになります（『大経

（大無量寿経）』）。シンヌと読みますが、親友（しんゆう）と同じことです。お釈迦様が友達として、同レベルの相手として扱ってくださるというのです。

また「念仏する人は人々の中の芬陀利華（ふんだりけ）である。観世音菩薩・大勢至菩薩がそのすぐれた友となる」のです（『観経（観無量寿経）』）。「芬陀利華」というのは「踏んだり蹴ったり」じゃないですよ（笑）。白蓮華ですね。白いハスのことで、ハスは泥の中に生えてもそれ自体は泥によごされず、清らかな蓮華は煩悩から抜け出して覚りの境地へ向かう姿を思わせるので、尊ばれます。

人々の中での芬陀利華である。つまり煩悩のどろどろした人間社会の中で、念仏の信者はそれほど際立（きわだ）って素晴らしい。観世音菩薩や大勢至菩薩がすぐれた友となってくださるのです。



念仏する人(白蓮華)は観世音菩薩・大勢至菩薩が友となってくださる

阿弥陀様に護られて、喜びがいっぱい

今のは諸仏でしたが、今度は阿弥陀様です。

まず、阿弥陀様が智慧と慈悲のお心をもって照らされる光明（心光）にいつも護られるご利益です（心光常護の益）。要するに、阿弥陀様がいつも護ってくださるというご利益です。

これは、阿弥陀様は「あまねく十方世界を照らし、その光明の中に念仏の衆生を摂（おさ）め取って（摂取（せっしゅ））決してお捨てにならない」（『観経（観無量寿経）』）のですから当然のことですが、同時に「摂取不捨」は阿弥陀様の別名のようになっています。おなじみの『正信偈』にも「摂取心光常照護」とありますね。

次は七番目ですね。

これは、今の六番目のご利益から起こってくる、そういう光に包まれるこ

とによって、当然喜びが起こってきます（心多歓喜の益）。

今年十一月、母（歌徳院）の十三回忌ですが、母の作詞による歌を思い出します。

一人の時は二人なの、二人の時は三人よ。その一人は仏様、影が離れずくるように、護ってくださる仏様。……

これは『歓喜のカンタータ』といって歌詞が親しみやすく、多くの方々に愛されてきた曲で、大谷楽苑でよく歌われました。

「大谷楽苑」というのは、時々皆さんにお話しますが、母が生前父と一緒に主宰していた仏教讃歌を中心に歌う合唱団です。その大谷楽苑はたぶんこちらにも演奏旅行に来たことがあったはずです。

ここで、生前本人に聞いたことを思い出しました。私がこの歌詞について、「どこかで聞いたような気がする。」と言ったら、「実は、ちょっと他からいただいた元があるのよ。」と。

みほとけさまに　　ひとりのときは二人なの　　みほとけさまと
手をあはせ　　二人のときは三人よ　　一緒なら
南無阿弥陀仏を　　その一人は　仏さま　　世のくるしみもなんのその
となへたら　　かげがはなれず　　心ゆたかに勇(いさ)みたつ
気持がさっぱり　　来るやうに　　わたしと　あなたと
しましたよ　　まもって下さる仏さま　　たすけあひ
朝のひかりがほのぼのと　　はげましあって
やみを明るくしたやうに　　行きませう

それは、「……一人ゐて喜ばば二人と思ふべし。二人ゐて喜ばば三人(みたり)と思ふべし。その一人(いちにん)は親鸞なり……」で、『御臨末(ごりんまつ)の御書(ごしょ)』といって親鸞聖人がご往生が近づいて述べられたお言葉の一部です。

いつも仏様が一緒にいて護ってくださる、そういう安心感と喜びとが溢れる、この二つのご利益をわかりやすい『歓喜のカンタータ』にしてくれました。

外から見えるご利益

ここまでお話してきた「良いこと」は、どちらかというと内面的な心のあり方が中心でしたが、今度は私たちの外に、体の外にはみ出してくるもので、周りの人から見てもわかるご利益です。

阿弥陀様からご信心をいただいて――言い換えれば、やがて極楽へ往生できる身となる――ご恩を感じると、当然のことながら、そのお徳に報いようとする気持ちが起こって、まずそれはお念仏となって口に現れてきます。そしてお念仏を称える心から滲(にじ)み出るもののすべてがご恩報謝の活動です（知恩報徳の益）。

その最たるものが、他の人にもお念仏を勧める、つまり阿弥陀様のお徳（大悲）を伝えることです（常行大悲の益）。

もしどなたかが、せっかくいただいたお念仏を独り占めにしているようであれば、その人は「私だけがお浄土へ行けるのや。」と言っているのと同じことですね。やっぱり人にもお浄土に行ってもらうように勧めないといけない。別の言い方をすると、独り占めにしているのであれば、その方のお念仏は「本物のご信心で

智子前裏方の十三回忌御遺品展に展示されるひな飾り

はない」のかも知れません。今お話している「知恩報徳」と「常行大悲」は、はじめにもお話したように信心にひっついたものだからです。

まあ、そうは言っても、人に勧めるについても、やいやい「お念仏、お念仏。」言うたって、いやなもんは逃げてしまいます。後にも言うように（自信教人信）、お念仏を勧めるのは大変難しいことです。たとえば私が書いた原稿を家の娘に「（お前のためになるから）これ読んでおきなさい。」と言っても読みません。「ん、ん」は言うけど、そこいらに置いておく。ちょっとも開いた形跡がない。ところが「これを読んでくれて、どういうふうに感じるか、どこがわかって、どこがわからんか、それを言ってくれんと、お父さんが困るんやでー。」というと読んでくれますね。押し付けたりオタメゴカシより、あっさり頼んだほうがいいですね。誰にでも通じる方法ではないですけどね。これも些細なことですが、勧め方のひとつかと思います。

もちろん、口で言うことより態度で示すことのほうが大変です。皆さんも

苦心されていると思います。

「知恩報徳」は阿弥陀様に向かっての姿勢で自分自身の称える念仏、自分のやることですね。「常行大悲」は他の人に向かっての姿勢で、他人に対する行いです。

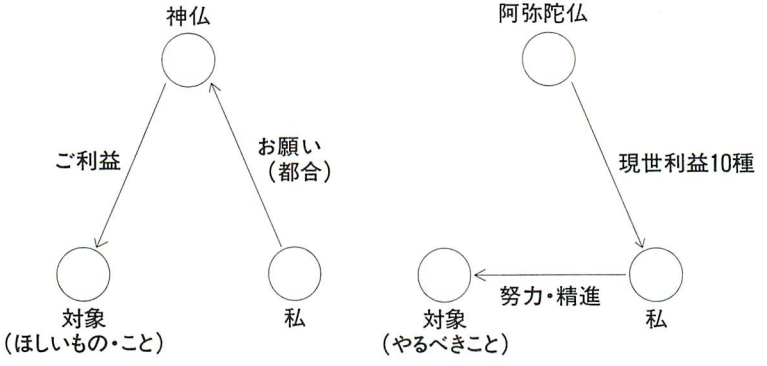
これも二つで一つ、つまりセットです。一つのご利益の表と裏といえます。

前にもお話しましたが、次に『往生礼讃』の一部を掲げておきます。

自信教人信　　自分が信じ、人にも教えて信じさせることは、
難中転更難　　難しい中にもなお難しい。
大悲伝普化　　弥陀の大悲を伝えて人々を広く教化することは、
真成報仏恩　　真に仏恩を報ずることである。

〝私〟と現世利益

今日のお話のはじめに、いわゆる現世利益と、浄土真宗でいう現世利益に



〈現世利益の対比〉

ついてお話しましたが、ここに図にしてみましょう。

いわゆる現世利益では、神仏に「お願いする」姿はまことに敬虔（けいけん）に見えるのですが、そのお願いの中身といえば、よく考えてみるとそのときそのときの自分の都合です。「都合」は自分の立場の変化によって、好都合が不都合に変わってしまうことは日常茶飯事です。昨日お願いしたことなのに、今日は不都合になってしまうということはいくらでもあります。また、不都合というよりお願いしたことを忘れてしまう場合の「苦しいときの神

頼み」も、これにあたりますね。そして私も、正直言って「このような現世利益を求める気持ちを起こしたことはありません。」などとはとても言えません。目先の幸福を求め、苦しみから逃れたいという気持ちが起こるのは人情ですね。でも、神仏は一人ひとりの都合を、しかも時々刻々と変わる都合を、一々聞いていたらたまったものではありません（笑）。

さらに、Aさんの好都合はBさんの不都合を招くようなこと――Aさんが儲ければBさんが損をするとか――もざらにあります。こんな場合、皆さんが神や仏であったら、Aさん、Bさんのいずれに軍配をお上げになりますか。

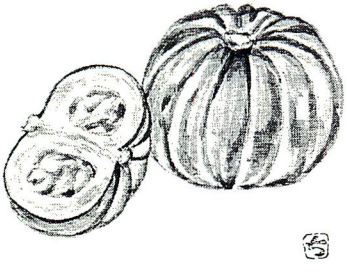
やはり、こういう現世利益を追い求めるのは詮（せん）のないことだと、早く気づかねばなりません。

これに対して、浄土真宗でいう現世利益は私たちを根底から支える力であり、私たちの生きる力です。私たちの前方を照らして見せる光明であり、や

るべきことをやる勇気を与えます。この光明は私たちに決して快くないものでも、正しいものを見せます。そして智慧と力を与えるのです。これすべて、阿弥陀様のご本願のお力、本願力によるものであることは、今さら繰り返すまでもないことです。

朝早くから大変お疲れさまでした。お身体には十分にお気をつけくださって、暑さには負けないように一層ご精進下さい。

編集部注＝『みめぐみの』第三部、第八部参照。



読者の頁

感想 意見

横浜市　青柳　省三さん

吉崎のある金津町出身の私にとってはなんと懐かしの〝嫁威し〟のお話だったので、いつもより身近に感じることができ想うままに感想を寄せました。

私にとって、蓮如上人という言葉は、多分未だ幼稚園にも行っていなかった頃、春のぽかぽかした昼寝時に、時々子供達の遊び相手をしてい「たけさん」の声で、『れんにょしょうにんさまのおとおり』と聞こえていたのが記憶の最初だったと思います。

「嫁威し」の話は小学生の頃はもう知っていました。しかし、この話は例えば、昔話の桃太郎、金太郎、かぐや姫などと同様、全くの作り話だと思っていました。

〈中略〉

多分、大学を卒業してから、数学と物理以外のことを考えるようになってからか、ようやく、原因があって結果があるということを認識したためか、世の中はすべてのことが変化するものであり、今も変化しつづけているのだと認識し始めたからか、〝八代蓮如上人――当地における信仰――嫁威し――強大な宗教基盤――一向一揆〟が繋がって解釈できるようになりました。

横浜市　高橋　博彦さん

光道法主様がわざわざ横浜の木鶏クラブの集まりにお出で下さった時初めてお逢いする機会をいただいた者です。お話とその御身辺からただよう明るい香気に大変うたれるものがありました。大変有り難く感謝申し上げ御縁に感謝しております。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

本年も余すところひと月あまりとなりました。十一月十四、十五の両日に歌徳院様（大谷智子前裏方）の十三回忌の法要が、光道台下の御親修で営まれ、併せて「智子前裏方遺品展」も開催され、懐かしい御遺品が多数展示されます。智子前裏方の想い出やご功績については、折に触れて紹介されております。

今回は、一般にいわれる――御利益目的の――現世利益の考え方と比較しながら、浄土真宗の現世利益の真髄を「前方を照らしてみせる光明」「やるべきことをやる勇気」として解りやすく説いて下さいました。

時々、既刊号の購入や定期購読のお問い合わせを頂きますが、刊行委員会までご連絡下さい。また、光暢前法主・智子前裏方の想い出やご功績が一杯に詰まった写真集『みめぐみの』に関しましても同様にお問い合わせ下さい。

みめぐみの　第14部

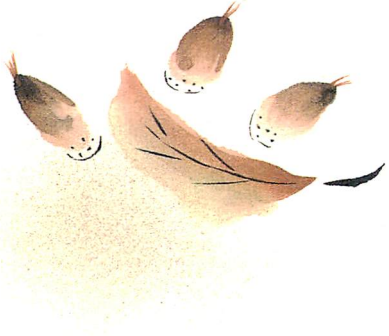
2001年11月５日　印刷
2001年11月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒600-8167 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内
TEL.075(351)3555　FAX.075(351)3120
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報社



みめぐみの刊行委員会刊